及ぶ国語の訳文”を1時間でしあげてしまっている，“俄かには信じ難い速さである”とあることである．たしかに森の文章（『全集』）のはじめには，ドイツ語の原文を午後9時にうけとったと，そして最後に，午後10時にしあげた，とある．だがわたしの経験でいえば，できあがっている下書きを清書するのに10分で400字である．訳しながら1時間7,000字というのは誤りにきまっている（いままでこの点は指摘されてこなかったようである）．森の文章はもっと批判的によんでいく必要があるのでなかろうか．

森は，とくに晩年の写真ではいかにもストイカルである．だが，かれの外見はひどくとりつくろわれたものであった．『独逸日記』は，周囲の人についての噂などはよくかきとめているが，自分のまずい面はださずにいるし，“エリーゼ”の影は『還東日乗』にはじめてさしてくるのである．著者は“隠し妻”児玉せきの名をださず，後妻茂子からの子3人についてもほとんどふれていない．“私事穿鑿趣味を排する”のが著者の態度である．だが，児玉せきの存在をしるとしらぬとで，森の性欲説，また「キタ・セクスアリス」の読みはちがってくるだろう．森茉莉の生活破綻ぶり，小堀杏奴の偏狭な父崇拝，常識人森類，そして3人の不和から推測すると，森の晩年は晩熟といったすんだ境地ではなく，かなり不思議な渦のまいているものであった．そういうなかで晩年の作品がうみだされた．

わたしがおもいえがく評伝とは，外的（社会的・私的）生活→内面生活→作品・業績→という循環構造をなすものである．対象となる人の内面生活の基盤となる社会的生活・私的生活（家庭内事情をふくむ）をしる必要があるし，それは“私事穿鑿趣味”として排されるべきものではあるまい．著者自身も『澀江抽齋』を論じて，“抽齋が何者であつたかの問に対しては，その知友・子孫に及んだ彼の影響、他者の記憶に印された人物像の細部までを再現することによつて初めて十分な答とすることができる，との歴史観がそこに成立するであらう”といっている．

森のばあいとくに，あのはげしい闘争的批判精神はどこからうまれたのか，また，その批判精神をもった人がどのように陸軍の機構に順応し・しかも昇進していけたか，晩年におけるかれの内面生活はどんなものであったか，きわめていかなくてはならない．

著者が本書につけた副題にならっていえば，森林太郎研究は“まだ普請中”なのである．

（岡田　靖雄）

［ミネルヴァ書房，〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1，TEL. 075(581)5191，2013年1月，B6判，733頁，4,200円＋税］

佐藤雅浩 著
『精神疾患言説の歴史社会学――「心の病」はなぜ流行するのか――』

本書は近代日本の「精神疾患に関するマスメディア報道を主たる分析対象として、精神疾患に関する大衆的な言説の構成と変容の過程、およびその動因を社会学的に考察」したものである。「精神疾患に関する大衆的な言説」は、『讀賣新聞』と『朝日新聞』の記事データベースの中からオンラインのキーワード検索によって集められた。その結果の一部は、明治から平成の時代に至るまでの精神疾患に関わる記事総数の変化、さらには精神疾患別の記事数の変化として、折れ線グラフで示されている。このグラフが意味するところは、そもそも「心の病」には流行というものがあり、各時代に特有の「心の病」があるということである。たとえば、1920～30年代は「神経衰弱」および「ヒステリー」の関連記事が、1950年代後半～70年代には「ノイローゼ」あるいは「神経症」

の関連記事が顕著に多い。こうした（あくまで新聞紙面上の）変遷を「心の病」の大衆流行現象と理解し、その原因や背景を歴史社会学的に分析したのが本書である。

次に内容を概観したい。第一章の先行研究や研究方法の検討に続いて、第二章以降は精神疾患言説の変遷とその背景を具体的に記述している。まず、第二章は1900年頃まで（明治初年から明治20年代）が分析の中心である。明治初年には近世以前から存続する民衆的で通俗的な「狂気」理解にもとづく逸脱報道（犯罪、自殺記事）が支配的だったが、明治20年頃になると精神疾患現象を医学的・衛生的視点から捉える「衛生記事」が登場しはじめる。これらの記事には、専門家（西洋医学の視点に立つ医師）の間接的・直接的な関与が見られる。第三章では1900年代から1910年代頃までの「神経衰弱」と「ヒステリー」に関する言説の流行を検討している。「神経衰弱」のほうは専門家による知識提供型の記事が先行したが、「ヒステリー」については専門家に先んじて大衆的な逸脱報道のなかでその名称が使われたという具合に、両者の言説構成過程には違いがあるという。また、この時期には、精神病学の学術的・社会制度的な整備に伴い、精神疾患に対する「科学的」な記事が主流になっていく。たとえば、新聞社が企画した「通俗学術講演会」を報じる記事は、呉秀三の話しぶりと聴衆の反応が再現され、「科学的」な精神疾患言説の大衆化場面の雰囲気をよく伝えている。他方、第四章は前章までとは違って、「流行のフェーズに至らなかった疾病概念の歴史を分析」し「精神疾患言説の大衆化要因を逆説的に明るみに出す」ことを主眼にしている。そのような疾患の代表として、1920年代から1930年代の「外傷性神経症」を取り上げている。この疾患は、PTSDの先行概念と目されるという意味で学説史・社会史研究では重要なのだが、当時は公的な災害補償制度に対する「欲求」に起因するもの（時には詐病との区別が困難）とされ、学術的な研究は衰退し、大衆的な流行に至らなかった。ただし、この時期には「神経衰弱」や「ヒステリー」も心因から説明されるようになったため、この二つも器質的基盤を第一とする医学研究の主流から外れていったという。第五章は「高度経済成長の病」として「ノイローゼ」が検討の中心となる。1950年代半ばから新聞記事での出現頻度を増やしているこの疾患が大衆化し定着した理由を、戦後における北米の精神分析学説の導入、公的医療保険制度の拡充、精神医療体制の変化の三点から説明したうえで、1960年前後から登場する、職場や住環境などの生活空間、あるいは育児中の母親や学生などに関わる「ノイローゼ」記事を紹介している。さらに、1970年代後半以降、心身相関にもとづく新たな疾病概念が創出され、従来「ノイローゼ」と総称されていた各種の症候が複数の診断名へと細分・再編された結果、「ノイローゼ」という単一の疾病概念が世間の注目を浴びる時代が終焉した「ポスト・ノイローゼ」時代の検討へと続く。最後の第六章の結論では、上記の章で述べられてきた精神疾患言説にみる発症モデルの時代的な変遷がいま一度整理され、それらの言説を成立させている「場」（言説空間）の検討、さらには、時代を超えて普遍的に成立する大衆的な精神疾患言説の構造なども分析されている。

内容紹介は以上だが、多くの読者が抱く懸念の一つは、「大衆的な言説」の抽出手続きだろう。たとえば、「大衆的な言説」（何が「大衆的」かは、さておき）を二社の新聞記事に代表させることの妥当性の問題、あるいは新聞記事データベースのキーワード検索にまつわる恣意性（データベースの作成側と検索者の双方で生じるバイアス）などなど。また著者は、既存の研究が〈A〉「〈危険な〉精神病者に関する歴史研究」と〈B〉「神経症圏の疾患の歴史」とに分断されており、「両者を架橋して一つの時代を描こうとする」ことが本書の意義であると示唆しているようである。だが、その一方で、「特定の時代を象徴するような言説空間内の重要性が認められない」という判断から、20世紀の精神疾患をまさに象徴する進行麻痺と統合失調症の言説（著者の分類では〈A〉の対象だろうか）をあっさりとスルーしているのが腑に落ちない。とはいえ、本書が扱う内容はとても豊

富で多岐にわたり、“精神”に関心をもつ様々な学問領域の研究者を刺激する労作と言えるだろう。一読に値する。

（橋本　　明）

［新曜社，〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9，TEL. 03（3264）4973，2013年3月，A5判，520頁，5,200円＋税］

書籍紹介

Bay, Alexander R.:
“Beriberi in Modern Japan: The Making of a National Disease”
（ベイ『近代日本における脚気：国民病の形成』）

近代以前の脚気は、世界中のどこにでも見られる風土病であった。日本では平安時代の貴族や江戸時代には江戸を中心に頻発し、明治以後とくに大正期から戦前戦後にかけて多数の患者と死者を出す国民病となった。脚気の歴史研究においては、何よりも山下政三先生による脚気の歴史三部作（1983～1995）が特筆される。脚気がなぜ日本において蔓延し国民病となったのか、これは医療医学だけではなく広く社会と政治にも深い関わりがある。この脚気の問題に米国の研究者が取り組み、英語の著作を発表したことはきわめて意義深いものに感じる。

著者のベイ氏は、米国カリフォルニア州のチャップマン大学の准教授で、日本の公衆衛生の歴史に焦点を当てた研究をしている。2008–2009年に来日し調査研究を行っている。本書の内容は以下の通りである。

序論　帝国の医学、権力、言説
1　災厄の地理学：江戸と東京の脚気
2　実験室を中心に据える
3　脚気：帝国文化の疾患
4　帝国と国民病への道
5　ビタミンの科学と無知の形成
6　胚芽米論争：1930年代におけるビタミンの利用と科学

（坂井　建雄）

［University of Rochester Press, 2012，p. 230］

京都橋大学女性歴史文化研究所 編
『医療の社会史――生・老・病・死』

京都橋大学女性歴史文化研究所の研究プロジェクトの成果のひとつであり、論文9本・コラム4本を収録している。同大学同研究所による『京都の女性史』同様、各著者の専門領域における最新の研究成果を盛り込みつつもテーマについて（本書では医療の社会的展開）通史的に概観できるように工夫されている点が有益である。